滝田ゆう論ノート

モラリストの大衆像

石子順造

歯切れの悪いユーモア

ぼくの言い方でなら、滝田ゆうは一個のモラリストなのである。そしてそれがまた、彼を秀れたユーモリストにしたてている理由でもある。

モラリストといっても、むろん近代のグッド・センスでいうような、教養主義的な道徳家という意味ではない。人間の弱さや愚かさを愛し、破綻せざるをえない卑俗な生活の細部に、つねに新鮮な好奇心と共感を抱いてきた、いわばもっともありふれた未練がましい人間、という意味においてである。したがって彼が視覚化してみせるユーモアも、どちらかといえば歯切れが悪く、みみっちくて、およそ洗練された感じがしない。だが、であればこそしばしば彼のユーモアは、もっとも日本人的な、というより日本的な大衆とでもいえる人たちの、いつわりのない保守性と進歩性の自己撞着を、的確に浮き出させて見せるのではなかろうか。それは、彼のあの独特な描線の相と、その描線によって形象化された大衆像によってしても、すでにかなりな程度明瞭に感じとれるところのものであろう、とぼくは思う。

滝田が本誌のレギュラー・メンバーの一人として、最初に登場した作品に「しずく」という短編があった。これはいまだにぼくの記憶に強く残っているものであり、滝田の持ち味がすでに大部分出ていたとも思うので、とりあえずこの作品をやや詳細に点検することから始めたい。

わずか十一頁の「しずく」は、数滴のしずくをしたたらしている片端の月の下に、なんとも不恰好な小男が、手錠をはめられて泣きべそをかき、斜めに立っているタイトル頁で始まる。背番号42をつけた死刑囚が、一人独房で眠っていた。なんの罪で死刑宣告を受けたのかはわからないが、およそ単純で素直そうなこの小心の囚人は、死ぬのがたまらなくいやなのだ。彼には教戒師の物わかりのよさが我慢できず、ひたすら死刑廃止論をぶったりもする。そしてある日「おむかえ」が来て、彼は連れて行かれる。絞首台だと思っていた彼の予期に反して、死刑道具はギロチンだったのであり、しかもギロチンの刃には、生ま生ましい血がしたたっていた。

「血じゃないですよ　そうじしたあとの水のしずくですよ　きれいなもんスよ」と看守に説明されても、彼の震えはとまらない。「来世に生きる……」と無理やり自分を静めて細首をさし出した時、首すじに一滴のしずくがたれ落ちた。「うわーっ!!」と悲鳴をあげた彼はその場に悶絶してしまう。だがそのしずくは、実は彼が眠っていた独房に落ちた雨漏りの一滴であった。

ギロチンは彼の夢の中の妄想だったのである。しかし死刑囚42番は、すぐに息絶えたように首をのばしたまま動かなかった……というお話である。

忘れがたい画像の印象

このみじめったらしく、これといって突飛でもない小男のエピソードが、不思議に強い印象をぼくに残したのはなぜだったろう?

おそらくそれは、なによりもまず画像のユニークさによってにちがいない。顔の中央にこぶのようにもり上がった鼻、とがったフガフガの口、額のてっぺんにはりついた大きな両眼、たよりないヘナヘナの首、低くチマチマした身体からはえ出ている同じくらいの長さ、太さの四肢。しかも「くうー」と二の腕で泣き、「ふんっ」と居直り、「ちいー」と口惜しがるこの二頭身の人物の、表情や動作の豊富さは抜群である。陰影のつけ方や水底の情景のようなムードの描写といい、滝田のマンガを見たものは、ストーリーの記憶をこえて、画像の印象を忘れがたいだろう。その意味でも滝田はまず、マンガ家という画家であることの、最低の不可欠な技術的要件を珍しくたしかに身

につけている、といえるのである。
　滝田の描線の相は、どちらかといえば近代的な人間、とくに支配者や上層の被支配者の形象化にはむいていないようだ。いわば下層の大衆むきである。たとえば横山泰三や小島功の描線と対比してみれば、その点もいっそう明らかだろう。泰三や功のすばやく走る鋭い描線は、近代的な圧倒的に多数の大衆の、無個性的に標準型化し、それなりに洗練されたパターンを写し出そうとする。だが滝田のどこか鈍重で、もたもたした描線は、そのようなものではない。しかしわれわれ自身まぎれもなく、泰三や功が描くような大衆の一員でありながら、なおそうであることのために強いられて、あるいはついあわてて忘れてきてしまったような、ある不透明であいまいな生ま身の情感を滝田の頼りな気で有機的な描線はすくいとってはいないか。
　滝田の描く人物像もまた、不特定多数の大衆なのであり、しかもつねに善良で実直な、その弱小部分の分身なのである。たとえば滝田がその描線で警官ややくざを描いてみせても、ぼくらはその威圧づらのすぐ裏に、屋台のおっさんやすし屋のあんちゃんが持っているであろうような、単純で人情もろく、多少ずるくて義理堅い、そんな人格をついすかして見てしまうのであり、およそ決定的な対立感をそがれてしまう。登場者たちはついに生活上の支配者ないし勝者の相貌を持つことはない。
　大衆はしばしば持ち前の善意と、身につけた保守性によって、支配者が巧妙に案出した秩序や道徳の見えない糸に自らを呪縛する。そして直接生産者であることの発意や創造性を自己撞着的にかかえこみながら、生存の無名性に埋没していく。滝田の描線の相のたしかな不安定さや、意識的な緩慢さ、細心の大胆さは、大衆のそのような矛盾した生活的欲望と悲願とを抽出するに適しているように思える。ぼくらは彼の描線に、どこかなつかしさと安らぎを覚えるのではないだろうか。それがまた一種の油性の調和力として、画像の動感をユーモアにつないでいるはずなのである。彼の画像がどこかユーモラスなのは、その表情や動作の多様さ以前に、彼の描線が、近代的な大衆の巧利的、機能的、即物的な合理感を、反作用的に非実用的、非打算的、情緒的な不合理感でつきかえす弾性を獲得しているからだと思う。

憤りには羨望を

　さて描線についてややくわしく述べすぎたようだが、ここでもう一度「しずく」に返って、滝田のユーモアを、その劇展開に追ってみよう。
　まちがいなくいえることは、喜と怒、哀と楽のあざやかなカット運びである。カットとカットをつなぐいわゆる繋辞の論理は、美学者中井正一が映画の場合にそくして早く指摘したように、受け手である大衆の欲望や期待と対応し、そのことが受け手の批評的参加を導きこむ。滝田の場合、「しずく」の教戒師と死刑囚とのやりとりでもわかるように、カットとカットとを対立的あるいは飛躍的につなぐ配慮が心にくいほどなのである。喜びに哀しみをつなぐのではなく怒りをおき、哀しみには楽しさを、またたとえば楽しさには苦しさをではなく悔しさを、憤りには羨望をといったふうに、微妙に読者の心的反応を引きずって放さない。
　図式的な対立をはずしたこのようなカット運びは、たしかに一歩誤れば平板な一本調子を結果しないとはかぎらない。しかし滝田の場合には、心理の襞を内側から照らし出すような慎重さでそれが進められているので、なめらかな動勢となって劇を立体化しうるのである。それも彼が大衆の日常感（す

「しずく」（「ガロ」昭和42年5月号より）

なわちコモン・センスの場〉と、そのすぐ背後の、反日常感〈すなわちコモン・ノンセンスの意味、価値領域〉とに相わたる、柔軟な人情の機微に通じているからであろうし、この二者の自律的なバランス回復力こそがユーモアの本体でもあった。

たしかに滝田はユーモリストであるがために、たとえば井上洋介のようなナンセンスに一見近く、実はかなり遠い。ナンセンスは日常感と反日常感とを一括して、これに一挙に対応しうる非日常的な秩序、価値領域なのであり、滝田はいまのところ大衆の日常的知覚を詳細に追跡しながら、ユーモアに固執している。むろんそれで悪いとか、事足りないというわけではない。このことはまた後でふれよう。

滝田のカット運びのうまさは、おそらく彼が以前何度か試みていた、かなり長いサイレント・マンガによって身につけたものにちがいない。彼のサイレント・マンガは、いまだ言葉の地下から十分飛翔していたとは思えず、とくにサイレントにした積極的な理由は見出せなかったが、やはりそこで彼は想念と意識とのダブル・イメージを何時しか修得したのだろう、とぼくは推察した。

そうであった。カットの運びによる飛躍の弾性は、同時に滝田のストーリー展開を片一方で決定的に支えている時刻の転換や交錯、いいかえれば想念と意識の重層にも及んでいた。

独房で寝ていた死刑囚42番が、雨漏りの一滴にギロチンの刃の血のしたたりを妄想し、再び最初の独房の場にかえった時には、眼をむいて悶絶していたというような進行は、滝田マンガの背骨であった。たとえば「しずく」の直後の「かわりみ」では、そのいっそう複合された形式が見られた。中華そばを食べる体験とどじょうすくいを踊る行為とがポイント返しになって、想念に現実がだぶり、時制が交錯される。近作でも「二等陸尉凹山三助の憂鬱」がそうした例の代表である。「二等陸尉……」について、いささかこの点を考えてみよう。

想念と意識の対立

この作品では、一人住まいの下宿の窓からぼんやりと雨降りの外を見やっている現在からの、二重の追想としてストーリーが構成されている。ポイント返しの契機は、コチコチいう時計の音であった。一つは、かわい子ちゃんとの逢引の、帰らなければならない時間を告げる置時計の音であり、もう一つは、職務で不発弾を掘り起こしていた時の、時限爆弾を想起さす緊張の表現としての腕時計の音である。置時計と腕時計との音の類同が、かわい子ちゃんへの情愛と不発弾への恐怖とをダブル・イメージにしながら、一人寝の現在に回復されるわけだから、いってみれば置時計の音は過去完了形として、腕時計の方は現在完了形として、それぞれ二つの時間をわたっていることになる。問題はその had-been と have-been との連動である。すなわちこの二時制と、現在 be との、二重点の構造化にほかならない。

「二等陸尉……」では、置時計から腕時計への過去完了が進行的に、つぎにその腕時計から置時計への現在完了が逆行的に、そしてまたその置時計から腕時計に回帰される進行の形で、現在が呼びもどされていた。この手順はなるほど巧妙で無難である。しかし第一の置時計から腕時計へわたるかわい子ちゃんへの情愛が、第二の腕時計から置時計をポイントとする不発弾への恐怖にだぶりながら、この二者を現在の憂鬱感にたかぶらせる部分は、一向に立体化して来ず、むしろ平板な短絡でしかない。いいかえれば情愛と恐怖の混淆（想念）と、憂鬱（現在）との間の、拮抗の緊張が乏しいのである。

ここは単純なすりかわりであってはまずい。むしろ「しずく」の場合で見られたような、現在意識を潜航する手続きとして、想念がとらえ返されていなければならなかったと思う。「しずく」では、第一カットと最終カットとの間で、現在は想念を媒介として進行していた。想念は、意識をかいくぐりながら意識の変革にかかわろうとし、それがドラマを構造化した。だが「二等陸尉……」では、たとえば第一カットのそのまた前に現在意識を描出するカットをおくとすれば、おそらく最終カットとほとんど変化のないものになったことだろう。すなわち意識の現在と想念の現在との間の対立と飛躍が欠けているのであり、ただ過去への想念が、現在の意識に並置されていたにすぎなかったのではないか。

このような短絡は昨年後半の滝田の作品でときどき見られたものであり、したがってその頃の彼の作品は、時制の転換や交錯なども、技巧的にしか結実しないでいた。とくに人情の機微を大衆の日本的な特質にあてて摘出する場合には、意識と想念の並列的な短絡は、もっとも一面的なものとしてあらわれ、印象をうすいものにする。

南博が『日本人の心理』で例証したような、日本的大衆の、「長いものに

「皿右衛門失踪」（「ガロ」昭和42年11月号）のとびら絵

は巻かれよ」とか「障らぬ神にたたりなし」とか、あるいは「身のほどを知れ」「上を見るな、下を見よ」といった幸福観や自己保全、そして一対一での対等の個的な人間関係を見失う義理人情の非合理性にしても、さらには自然観照的な悟得に逃避しようとする精神主義にしても、これらを一面的に見るかぎりでは、ひたすら自閉的な自我の定立過程としか写らないだろう。そのような非合理性や自己否定の論理を近代的市民の合理感覚や自己肯定の論理につきつけることができてこそ、すなわち非合理性や自己否定の保守性、消極性を、攻撃の武器として進歩性、積極性に逆取りすることができる柔軟さこそが、モラリストの真骨頂なのでもあった。

ナンセンスに接近

大衆のアバズレ女的性格に処女性を感受できるはずの滝田は、先述したような描出力からいって、大衆の深い欲望や悲願につきすぎもしたので、昨年の後半は総じて図式的な渋滞にふみこんでいたらしい。結末がアンハッピーなのは一向にかまわないと思うのだが、そのアンハッピーさが、底抜けのオプティミズムに——底抜けのオプティミズムは、現実の生活の場では大抵空中分解せざるをえないわけだから、アンハッピーは当然だとしても——よって大衆の自己矛盾したヴァイタリーと対応しえない時、ストーリーは平板に、ぼくらの読後感はただ出口のなさに追いこまれるばかりなのである。こうなっては、滝田の描線はくどく、時制の交錯や転換は小うるさく感じられるだけだろう。

だが、おそらく本誌六八年一月号の「浪曲師ベトナムに死す」あたりから、滝田は彼本来の自在さを取りもどしつつある。パチンコの玉とベトナム戦での米軍の兇器ボール爆弾との出会いは、浪曲師の戦死をてこにして一歩ユーモアをすら脱しつつあるかに見えた。ここでは想念が、よりナンセンスに接近している。

ぼくの考えでなら、今日のぼくらにより切実なセンスは、おそらくナンセンスなのである。滝田は言葉によるジョークによってよりはむしろ、無限の自由に解放される想念のギャグによって、現在意識を一気にナンセンスに投射してしまうことができるはずだと思う。彼の作品のタイトル頁は、カーツーンとはいえないが、いわばひとつのシークェンスとしての説得力をもち、ここではナンセンスが生かされている。ぼくはこれもまた滝田が鋭敏な、音への反射神経を手がかりにして、この狂騒に満ちたぼくらの文明観を、一度すっかり破産させてはくれまいか、とひそかに期待している。

＊

〈注〉「ガロ」掲載分の滝田ゆう作品リスト

▽**「あしがる」**昭42年4月号
▽**「しずく」**同5月号
▽**「かわりみ」**同6月号
▽**「赤　飯（こわめし）」**同7月号
▽**「ふえあぷれい」**同8月号
▽**「風法師」**同9月号
▽**「うわさの系譜」**同10月号
▽**「昼下りの妄想」「くちおしい」「皿右衛門失踪」**同11月号
▽**「死に急ぎの記録」**同12月号
▽**「浪曲師ベトナムに死す」「長い道」**昭43年一月号
▽**「三等陸尉凹山三助の憂鬱」**同2月号
▽**「おこつ狂騒曲」**同3月号